大震災に遭遇して

松山義則（総長）

この一月、阪神大震災で、数多くの方がたが亡くなり、それぞれの都市が莫大な被害を受けました。心から弔意を表しお見舞を申し上げたいと思います。

われわれの住する地球は、五十億年以前に誕生し、激しい地殻変動をくりかえしてきたと言われます。地球上の生物はその度ごとに生命を失いましたし、現代もこのたびの災害のように悲劇をさけることはできません。しかも地球は将来、一〇〇億年後には太陽にのみこまれ、その数十億年後には爆発して消滅すると考えられています。この激動する地球上に、人類は出現し生命を継承してきました。環境の激変するなかに、人類は生きのび、その進化の過程をたどってきたと思われます。人類が生存してきた環境はきびしいものでありました。しかしその酷しさに対処するなかで、人類が進化の段階を経て、より高度な現代人の誕生にまでたどりついたと人類学者は考えています。たとえば、アフリカ大陸に起った巨大な地殻変動は環境条件の激変を生じ、アフリカを南北にわた

る山脈を隆起させ、東西の両地域にわけました。西の地域は熱帯雨林となり、緑にあふれるその森林は動物たちを安住させる楽園でありました。果実は豊富にたわわに実り、森は外敵から身の安全を保障する自然環境をつくっていました。そこで動物たちは安定した食物連鎖のなかで生存の調和を満喫していたといえましょう。これに対して険峻な山脈によってさえぎられたアフリカの東部地域は森林まばらであり、これにかわって草原の大きく開かれた広がりをみせていました。果実は少く、身をかくす樹林もなく、森の豊かな恵みをうばわれた人類の祖先たちは、どうしても二本足で立ち、草原を歩いて遠くにまで果実を探し求めねばなりませんでした。チンパンジーから猿人への分岐がそこで行われ、手の筋肉や構造の変化が、石器を制作することとなり、また声帯の構造の変化は言語機能を発展させ、さらに脳の構造と重量に変化を生じる方向に、何百万年かかっての進化の道を歩ませたと研究者たちは想定しています。森を失い、楽園をおわれたチンパンジーは、樹林の豊かな環境に生きたチンパンジーとはことなった環境でのきびしい対処に応じ、新しい適応のなかに進化の道を歩んだことでありましょう。

　このような地球環境は社会環境とともに人間に対する客観的現実であります。人間はこの環境に直面して現実を認知しています。しかし、認識についてよく言われますように、主観、あるいは主体に基礎をおく現実の認識を無視できません。現実はたんに客観的に認識されるというのではなく、絶対的な個別性、互換できない主体における現実に大きな重みがあると思います。この個別性に生きるひとりの人間が現実にかかわるところに主観的現実の認識が成立することとなるでしょう。この主観性、主体性の現実認識において直面する現実は、まことにきびしく、自分にとっての運命的である出来事をさけることができません。

われわれは、人間が存在する環境をどのように認識しているのか、環境と生活体との関係そのものにある主観的認識が、絶対的な個別性、誰とも交換できない主体において認識が成立し、そして地球環境や社会環境の現実は常に人間にとってきびしいものであると考えてきました。地球の未来はいまも未知の問題であり、明日何が生じるかは人知をはるかに越えています。自然科学はその予知にいどんではいますがなお不可知の世界を多く残しています。社会環境の未来の予想、予測についても社会科学者はその法則性を樹立して体系化を専念しています。人間の心の予測についても同じことが言えるでしょう。しかしすべては人間の知恵をはるかに越えるものです。

森林の豊かな生活から放遂されたわれわれの祖先たちは、乏しく苦しい環境のなかを歩み、その現実に対処して新しく自己を形成してまいりました。何百万年にもわたる自然史の流れのなかで、人類は苦しい環境に対処し乗りきってきました。そして自然界での優位を占め、人類独自の歴史時代とその文化を形成してきたのであります。

ひとりひとりの人間は、他の人間とは交換不可能な独自性、絶対的な個別性をもち、その主観的現実認識に生きています。誕生から死に至る限られた生涯のなかで、自己の歴史をきざんでいます。しかも、人類は独自の優越した世界があるといいながらも、なお自然の脅威に勝つことができません。そればかりではなく人間同志、集団同志の対立や闘争は残虐さにみち、理性的なものからはるかに遠い行動をとる宿命をになっています。このような人間性の現実を直視するなかで、われわれは生きること、自己の歴史をきずくことにすべてを投じねばなりません。

卒業生のみなさんは大学を去る直前に遭遇した大災害の歴史的事件を忘れられることはないと思います。人間はときに勝利者となり、楽園に住む幸運に恵まれることもあれば、また失敗や災難、

敗北に出会います。人間は自分が遭遇した失敗や災難、敗北から学ぶことが、幸運から学ぶこと以上のものを得るものです。そしてこれが自己の歴史を築き上げる原動力となるでありましょう。楽園を追われたわれわれの祖先たちは、苛酷な自然環境に対処し、敗北の歴史をかさねながらもそれを克服し、時をかけて人類の進化をなしとげました。

われわれは未来に絶望しようとするときにも、これに耐えて希望を堅持したいと思います。新島嚢先生は「言うをやめよ世事難嶮多しと。成否は明々たり天意に関す」と吟じられましたが、みなさんがこれからの自己の歴史を形成し、歩んでいかれる苦闘のなかに、明るい希望をもちつづけていただきたいと思います。そしてこの希望は自己を超越した永遠なるものから生れます。眼前の現実認識の世界を越えたところにあるものへの求道、思慕のなかに、おのずと希望は生じるでありましょう。自然を友とし、子どもと時を忘れて遊び、仏門の真理に飄然として生きた詩人、歌人であった良寛は「かたみとて何か残さむ春は花　山ほととぎす　秋はもちぢ葉」と歌いました。人間は自己にとらわれ、それを乗りこえられない存在ですが、良寛のこの歌には、すべてを捧げつくした心、天に通じる存在でありたいという願い、不思議なこの生命の現実認識からおのずと導き出された心境をうかがい知ることができます。新島先生の「成否は明々たり天意に関す」と吟じられたなかに、すべてを上なるものに託した精神を読みとることができましょう。

これからそれぞれの道へ歩み出されるみなさんが、この大震災の惨状のなかで人間の宿命を考え、尊いその生命を失われた方がたのことを憶え、酷しい時にも苦しい時にも、天来の希望をみつめ、勇気をもって歩みとおして下さい。互いに人間同志が力をあわせ、決して他人を苦しめ人とならない自己の歴史を生きて下さい。神があなたとともにいましたまうよう祈ります。

自発と他からの要請

岩山太次郎
（大学長）

ご卒業おめでとうございます。

今日、この卒業式・修了式に臨んでおられるのは、大学の学部を終えられる方、大学院前期課程を修了される方、博士の学位を受けられる方々であります。皆さんに心からお祝いを申し上げます。

皆さんはこれまでとは違った世界、違った生活に入ろうとされているわけですが、一つだけはこれまでと同じものを持ちつづけていただきたいと思います。

これまで学園生活で様々なことを学ばれ、様々なことを経験されたのでありましょうが、その経験のなかで、去る一月一七日未明におきた阪神・淡路の大震災、大災害はもっとも大きな経験のひとつでありましょう。あの大震災はわたしたちの想像をはるかに越えるものでありました。五千名を越える方々が亡くなられましたことは誠に痛ましいことであります。卒業される皆さんの中にも

肉親を亡くされた方もあります。災害を受けられた方もおられます。衷心よりお見舞いを申しあげます。

また、この中には被災地で救援活動されたボランティアも多数おられます。そのような方には本当に頭がさがる思いがいたします。よく頑張ってくださった方々をわたしたちは誇らしく思います。

ご存知のように「ボランティア」という言葉は、ラテン語の voluntari という語から来ている言葉であります。英語であれば voluntary にあたる言葉です。「任意の、自発的な、自発的になされる、自由に選んでなされる、自らの意志による」という意味であります。

このボランティアに関して、先日、ある新聞に興味深い文章が掲載されていました。お読みになった方もあろうと思います。「阪神大震災の被災地で活動しているボランティアの中には、大勢の学生がいる。そういう学生たちに配慮してもらいたい、と文部省が国公私立大学や短大などに要請したそうだ……文部省が要請の文書を出すということに、おや、と思う」とありました。さらにその文章はこう続きます。「文部省の『行政指導』にとくに違和感を覚えるのは、皮肉なことだが、ボランティア活動そのものが自由意志と自主性の表れであるからだ」と。まさにその通りであります。ボランティア活動にはそれが許される範囲や方法が社会秩序を乱すものであってはならないと思いますが、他からの要請を受けてなされるものではなく、自由意志と自主性の表れそのものであるから、ボランティアは要請や管理によって活動しているのではないのであります。

同志社大学への入学以来、何度も読まれたり、聞かれたことのあります「同志社大学設立の旨意」は、創立者新島が自由意志の人であり、どれほど自由意志を大切なものとされた人であるかがよく分かるものであります。一八六四年元治元年、函館から日本を後にされたのは、まさにこの自由意

志にもとづく行為でありました。冒頭の方で、「幕政の末路、外交切迫して人心動揺するの時に際し、余不肖海外遊学の志を抱き、、脱藩して函館に赴き」とありますが、これは新島の自由意志による行為なのであります。私立の大学を設立しようとしたのも、新島は人の自由意志を大切なものと考えたからであります。「吾人は政府の手に於て設立したる大学の実に有益なるを疑はず、然れども人民の手に拠って設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、もとより資金の高より云ひ、制度の完備したる所より云へば、私立は官立に比較し得べきものにあらざるべし、然れどもその生徒の独自一己の気象を発揮し、自治自立の人民を養成するに至っては、これ私立大学特性の長所たるを信ぜずんばあらず」と新島は言います。規制によるのではなく、設立しようとするものも、またそこに学ぶものにも、自由意志によることの重要さを述べています。さらにこう言います。「品行と精神とを養成するは、決して区々たる理論、区々たる検策法のよくなす所にあらず」と。

自発的な、自由意志によるものほど、美しく尊いものはありません。結果を恐れず自らの中からほとばしるもの、自分そのものを歌ったアメリカ最大の詩人の一人に Walt Whitman（一八一九―九二）という詩人がいます。彼は "Spontaneous me"「自発的なぼく」（一八五六）という詩でこう言います。

自発的なぼく、すなわち「自然」
美しい朝、昇る太陽、ともにいれば楽しい友
ぼくの肩にゆったりかかる友の腕
ななかまどの花で白い丘腹
晩秋の丘腹、赤、紫、薄い緑と濃い緑の多様な色調

草原の豊かな掛け布、動物たち鳥たち、自然のままの目立たぬ堤、野生のりんご、散在する小石たち
したたり落ちる美しい断片たち
たまたまぼくが彼らのことを想い出したり心に浮かべたりするたびに一つまた一つと野放図に増えてゆく自然
本当の詩…

（杉木、鍋島、酒元訳）

自然的なものは昇る太陽のように美しく、これこそ本当の詩、生命といえるものであります。

Whitman は一八五五年に一二篇の詩からなる詩集 *Leaves of Grass*『草の葉』を出版以来、一八九二年の版まで、数多くの自発的な詩を歌いつづけた詩人でした。規則を受け入れず、自分の信じるものを歌った人民詩人、民衆詩人でありました。

新島の言う「良心ノ全身ニ充満シタル」人たるには「自治自立」の人でなければなりません。良心は自発的でなければ発揮できません。ボランティアの精神は良心を発揮するひとつのものであると思います。

どうか皆さんが同志社大学で学びとられた良心を、要請・規制によるのではなく、自由意志により、自発的に発揮されることを、ボランティアでありつづけられることを期待します。

卒業生の皆さんへ

児玉実英
（女子大学長）

卒業生の皆さん、このたびは、おめでとう。

皆さん方は、日本の未来をきり拓き、世界の未来を支える人たちです。どうか同志社で学んだことを大切にし、新島精神を胸に、輝くようなすばらしい未来社会を築いていってください。

皆さん方は、在学中に、つまずいたり悩んだりした経験が、あったことでしょう。皆さん方は、それらを乗り越え、そのたびに強くなって、今そこにおられるのだと思います。人生の荒波を越えて進むたくましさを、しっかり身につけておられるはずだと確信しています。

イギリスの作家ジョナサン・スイフトという人の作品に、『ガリヴァー旅行記』（一八二六年）という小説があります。これは、ガリヴァーが難船して人間の十二分の一のサイズの人たちが住んでいるリリパットという国を訪ねたり、また再び海に出て遭難し今度は大きな人たちの住んでいるブ

ロブディングナグという巨人国に漂着したりする物語ですが、実は、この物語には、あまり知られていませんけれども、第三部と第四部があります。第三部ではガリヴァーは、また遭難して、奇妙な空に浮く島ラプータに吊しあげられるように救助されます。そして、いくつかの国を冒険したあと、江戸に連れて行かれ、長崎を経て英国に戻るのです。――日本は、十八世紀のイギリスでは半ば想像上の世界と接してあって現実の世界のもっとも遠いところにある国として描かれているわけなのですが――それはともかく、第三部では、学者がキウリから太陽光線を抽出する実験をしたりしています。おもしろいのは哲学者が思索に没頭するあまり、危くて一人で歩けない。そこで「注意喚起人」を雇って注意をしてもらって生活しているようすが描かれていることです。ものを考えこんで危険が迫ったようなとき、「注意喚起人」がまぶたにさわってくれないと、足をふみはずしたり、頭を柱にぶっつけたり、街では人とぶつかったりしてしまう、そのようなことを書いています。

皆さんは今まで、多少の社会経験はしたものの、大かた勉強に専念し、先生方や家族の人たちからいろいろ注意を受けてきたことと思います。しかしこれから、一人前の社会人として世の中に出ると、そのような「注意喚起人」がいなくなります。自分の力と自分の判断で、未知の世界を歩んでいかなければなりません。これは大変なことです。しかし皆さんは、もう充分一人歩きできます。「たおれた親を喰い尽くして力を貯える獅子の子のように、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行くがいい」と、有島武郎は書いています。師を乗り越えて、未来のため、皆さん方の未来を作っていってください。

しかし皆さん方が巣立って行く前に、一言だけ注意しておきたいことがあります。それは、常に自分自身、明確な見通しをもっておきなさい、ということです。

新島襄先生が函館から脱国されたのは、だいたい皆さんと同じ二十一才のときのことでしたが、自らの開国の道をきり拓くという明確な見通しをもっておられました。船上、暇にまかせて英語を教えてくれた船客が、なにかのはずみで新島先生の頭をたたいたことがありました。そのとき先生は、悔辱されたと思って自分の部屋に戻り、刀をもって出ようとされました。が、そのとき「待て」という声を先生は自分の中で聞かれました。今とり返しのつかないことをしてしまっては自分の大きな計画が台なしになる、そう思って先生は部屋に戻ったと書いておられます。

その後新島先生は、なん度も「待て」という声を聞かれたことでしょう。先生は軽はずみな言動を慎しみ、大きな目的を思い、自己陶治していかれたものです。先生が筆で書かれた書には、力強さと自己抑制が見えるでしょう。多くの人を感動させ、大きな事業をなしとげられた新島先生には、未来を作る強い意志と行動力に加えて大きな目的への明確な見通しとその達成のための自己抑制があったのです。

慎重に、そして大胆に、新島精神と明確な見通しをもって皆さん方の未来を築いていってください。